
二重螺旋の羅刹と骸〔クロワッサン様企画掲載〕

モト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二重螺旋の羅刹と骸（クロワッサン様企画掲載）

【Nコード】

N8496R

【作者名】

モト

【あらすじ】

クロワッサン様企画参加の短編、
クロワッサン様のお宅の 響礼奈ちゃんVSうちのヘタレ キリト。
タイトル見てミク二次？ と思って期待の方は恐れ入りますがリターンお願いします。

(前書き)

クロワッサン様の企画に参加させていただいておりますモトです。

長いとか、能書きはええんじゃ！はよ戦闘開始しろや！という方は5000文字くらいふっ飛ばして下さい。私情により多忙な為、推敲等イマイチ。すみません、でも書いてしまったからには掲載！

(え……) 後日ぼそぼそ直しているかもしれませんがorz

追記：補足として。文章中12〜3歳という記載がありますが、礼奈ちゃんは15歳です。いや、欧人(?)のキリトからみたら日本人の少女は年齢、下に見える筈なので。

無駄な長さ……だが後悔はしていない!! 多分。

金色の光が空を凧いだ。翼の様な物を持った人間が遙か天から降って来た。

響礼奈は啞然として立ちつくしていた。彼女はそれが墜落する瞬間を見てしまったのだ。そうして気が付くところに、この空間にいたのである。何が何だか分からない。

先程まではいつものもようにいつもの街並みを眺めながらいつもの道を歩いてきた筈だった。確かに彼女は自分の身の回り興味を持つてはいなかった、だからと言って彼女の鋭敏な感覚がそうそうこのような事態を見逃すはずもない。歩いていたら、気付かないうちに異世界に？ そんなものは漫画か何かの世界だけの話であってそんな間抜けた人間など現実的に考えてそうそう居ないであろう。

琥珀色の光に満たされた空間には二重螺旋の階段、中央の吹き抜けはどこまでも続いているように見える、そうしてそこに浮かぶ無数の立方体……光の筋に導かれる様に彼女は二重螺旋の一方を昇りだした。先程翼のある人間が落ちた辺りまで行って見ようと、その辺りは階段の上過ぎて、どちらの階段が正解だか定かでは無かったが、まあ違っていたら近くに辿りついてから階段の交差点でもう一方に跳び移れば良い。どれほど登ったか、ふと礼奈が顔を上げると自分の進行方向を妨げる人影を見つけた。(おかしい……心配なんて感じなかった) 彼女はその人影……彼の前で立ち止まる。彼は彼女の方をチラリとみてそうして薄く笑った。心底愉しそうな笑みである、と彼女は思った。袖の内に仕組んだスローイングナイフ

を気取られないようにそつと確認する。

「やあ」

男は右手をひらひらと振って見せた。その様子が軽々しく、礼奈は少しばかり嫌悪感を覚えた。

「上に墜落した彼が気になるのかな？」

「気になるも何も。それしか無い」

「それしか無いとは？」

「……あなた、何？」

「何とは……！」

はんつと、鼻で笑って彼は一步下がった。

「俺は五十嵐天成という」

「そつ」

「君と彼をここに集めたのは俺だ」

「そつ」

「もちろんここは現実世界では無い。第四の壁を突破した先と違って分かるかな？」

「……」

「君は彼と戦わなければならぬ」

「決めつけられるのは好きじゃない」

「でなければ俺は君をここから返す訳にはいかないな」

「そつ」

男は困った様に髪を掻き上げふうつと溜息を溢した。

「上に落ちたアレだけど、興味ある？」

「興味？」

「彼は他のルールに縛られた世界の人間だ。けれど人間という意味では俺達と変わらない。そう言った意味では彼は正しく悪だ。ちょっとばかり彼のデータを君にあげよう」

男が礼奈に手をかざす、普段ならば避けようと思うのだが何故かそう思う事すら彼女には赦されなかった。とん……と額を軽く貫く感覚と共に、映像が彼女の頭の中に傾れ込んできた。

「女泣かせな奴だろう？」

男は言う。礼奈は少し目を瞑って軽く頭を振ってみた。確かに……感情的に思えば嫌悪感を抱かずにはいられない彼の所業ではあるが、だがしかしそれらはいくまで世間一般のことである。彼女は一度大きく息を吸い込みそうして言った。

「男だとか女だとかそんな事は生物学上での差でしかないし、それが優位であったりそうでなかったりする事はあるかもしれないけど、だからと言って卑屈になるのは違うと思う」

「ふむ？」

「それに、自分の満足を差し置いて相手の行動を責めるのも違うと思う」

「なんだあ、こういう情報を言えば女の子なら逆上すると思ったのにつまらないな」

「そう」

「まあ、今殺す殺さないなんていうのは君の判断に任せるよ。とにかくここから出たければ僕を満足させる事だね」

「あなたの個人的快樂の為の道化と言う事なのね」

「どうだろう、君が自由に取ってくれて構わないよ」

それからつらつらと、この世界の仕組みを勝手気ままに喋り散ら

して彼……五十嵐天成は姿を消した。

「……何も、させてもらえなかった」

礼奈は呟いた。何かをしようという意志ですら彼の前では封じられてしまう、そう言った印象。彼女は螺旋階段を見上げた。天井なんて無い、そう思わせるに十分な奥行き感……そして今先程自分がいたはずの階下を見て絶句する。既にそこには始まりなんて無かった。どこまでも、奈落に続く螺旋がただただ有るだけ……。空間を漂う立方体をP7で撃ってみた。それは弾丸に弾かれず挟られず、少しだけ表面を削って、そこに浮いたままだった。思い切ってナイフ伝いに触れて体重をかけて見る。若干沈みこんだ感覚があるが、だが、足場にする程度ならば沈んでしまいそうにない。

「……」

取り敢えず、行ってみるしかない。彼女はただ黙々と階段を昇った。

目を覚ます、ここは……？

一面のセピア色の光に目を細める。

常装が悉く湿っていた。その冷たさに身震いをする、頭の芯が酷く痛む、ああ俺はどうしたんだっけ……思い起こそうにも記憶はある一定の所までしか無い。氷に覆われた大地にそびえる鉛色の巨大

な塔、そして……口の中の不愉快な砂利を吐きだした。そんな事は
どうだっていい、否考えるだけ無駄だ。核心はそう、ここがどこで、
彼女がどうなったのかという事だけ……。

上体を腕で押し上げて立ち上がるうとすると銃声が響いた。咄嗟
に伏せる、こちら側に着弾した気配は無い、障害物に遮られたのだ。
銃声の直後、視界に漂う立体物の隅が欠け飛び散るのを俺は見えてい
た。どうやら俺を狙っているらしい。

おそらくここはまだ戦場であるのだろう。しかしそれにしてもは何
とも……俺は辺りに目をやった。巨大な、階段？ それも曲がりく
ねった、そう螺旋階段だ。しかし妙な事にただ一重の螺旋という訳
ではなさそうで、というのも鉄柵越しに吹き抜け部分を見ても自分
の視線と同じ高さに、やはり階段がつつらと伸びているのだ。と
すれば考えられるのは二重螺旋の階段か。

螺旋の中央、吹き抜け部分には乳半のキューブが無数に漂ってい
る。シャンパングラスの中を漂う気泡の様にゆらゆらと頼りなさげ
に浮かぶそれらは、先程の銃撃を受けても多少削れる程度の強度と、
銃弾の勢いに押し負けないだけの浮遊力がある。

吹き抜けに身を乗り出して上下を確かめる。戦場に於いて大凡こ
のような行為は殺してくれと相手に訴えかけるようなものだが、俺
には不思議とその銃弾が絶対に俺の存在を消し尽くしたりはしない
……という確証があったのだ。敵は俺を殺さない、殺すのであれば
俺が寝ている間にやっつけてしまえばよかったのだから。天井と床に巨
大で精密な鏡を仕込んでいるのかと疑いたくなるような……気の遠
くなる様な奥行き感、そして永遠と続く黒の二重螺旋が俺の平衡感
覚を瞬時に奪い去って行った。(俺が写り込んで無いつて事はミラ
ートリックでは無いつて訳だ、面倒 っ)

再びの銃声。

バラバラと壁面を削る円弧が俺の頭の上を過ぎる。二重螺旋の対岸だ、目を向けると一人の少女がじつとこちらを見つめている事に気がついた。斜めに透ける陽光、長く放射状に延びた鉄柵の影……彼女と俺との狭間をキューブがゆっくりと漂い、それまで隠れていた彼女の全身が露わになる。(それはむこうから見ても同じ事だろう)俺が何も身構えていないのを見て少し意外そうな表情を浮かべ、そして眉を顰めた。

見た所、12〜3歳程の少女か、しかしその手には拳銃が、そして歳の割には落ち着き過ぎた瞳をしていると思った。塔の……兵士には見えない。民間人なのだろうか、敵兵である俺を狙っているのか、様子を覗うように少し小首を傾げてみせる彼女に声をかける。

「(やあ。ここは、一体どのあたりなのかな。教えてくれると助かるんだが……もちろん俺は君にとって敵国の兵士だけど……まあ見ての通りほとんど丸腰だし、なんなら武器を捨てても良いさ。教えてくれるだけで良いんだけど)」

彼女の国の言語で言った、はずだが少女は更に眉を顰めて何か、言った。聞いた事の無い言語で……。

「……君は」

言いかけた所で激しい頭痛に襲われた、頭の芯でフラッシュをたかれたような感覚、直接鼓膜を震わせるような声が響く。

『ああ実にすまない。忘れていたよ、負荷がかかるが俺が解らねえ』

んであなたの方を弄らせてもらつよ。ちよいと不快かもしれないが我慢してくれ、と、俺の言葉の意味が解るか？』

「いや……解らない」

『なら良し。調整終了だ』

その言葉を最後に痛みが一気に引いて行つた。冷や汗が顎を伝い、落ちる。今は……。

「羽……。」

少女の声に我に返る。羽……翼？ 彼女を知っているのか、鼓動が高鳴るのを抑えて冷静を装って問う。

「俺も見たよ、完全なプリズムの光の翼、圧倒的な暴力それでいて圧倒的な美麗、本当に綺麗だった……なあ、その後どうなっている？ 君もアレを追っているの？」

「……知らない。何を言っているのか解らない。私が言っているのは金色の方」

「金色なんて俺は知らない」

「そう」

違和感無く喋っているにも関わらず言語が通じる事に違和感を覚え尋ねる。俺は無意識に今母国語を話しているじゃないか……？

「何だ、君、この国の人間じゃないのか？」

「この国、がどこかは知らない。私もあなたもこの国の人間じゃない」

「呑み込めないな。こんなマイナーな言語を知っていて、何故隠す？」

「私にもよくわからない」

少女は一瞬言葉に詰まり、そして天を見上げた。

「私とあなたは彼にここに連れて来られて、そしてどちらかを倒さない限り帰れないみたい」

「……」

どこか、壊れた子なのだろうか……まあ無理もない。こんな戦場に巻き込まれたのならば民間人でこの幼さで有れば無きにしも非ずだろう。

「君、名前は？」

「響礼奈」

「ヒビキ……レナ？ 珍しい名前だ。俺はキリト……キリト・ネロクドウという名前、と言う事にしておいてくれ」

「うん」

彼女……レナは小さく頷き少し笑った。俺は立ち上がり、そして緩やかに弧を描く階段を昇り始めた。彼女もゆっくりと階段を昇る。互いに昇って行けば交点に辿りつく、そこでならもう少し落ち着いて話ができるだろう。階段を昇る二つの足音がかつかつと響く。

「悪い人では、なさそう」

「そうかな、俺は悪人だよ」

「銃で撃った私を撃たなかった」

「まあね」

「丸腰つて嘘でしょ」

彼女の言葉に引っかかりを覚えるが、ただの言葉遊びかもしれないと軽く受け流す。

「……で、とりあえずここから外に出ないとならない訳だけど」
「それなんだけど……」

彼女は言いにくそうに一度言葉を切ったが、やがて訥々と事情を語り出した。信じ難い、冗談にも程がある、まるで夢のような話だった。俺たちはそれぞれ違ったルールの世界の住人だと言う事、それが五十嵐天成と名乗る男によって引き合わされた事、この世界から脱出するには戦闘をしあうしかないと言う事、そしてここでのダメージは元の世界には禍根を残さないと言う事等等。

「私も解せない、けどそういうルールみたいなの」

「うん？」

「殺し合えってこと」

「何故？」

「知らない、私達は道化みただから。理由なんて知らなくていいということかな、違うかな。彼を満足させられればそれで良いみたいなんだけど」

「俺としては女性とやり合つのは気が引けるよ。サーペントならともかく」

「サーペント？」

「いや……君みたいな民間人とは」

「そう」

二重螺旋の交点に辿りついた。そこで改めて少女を眺める。二つに縛った髪が揺れていた。意思の強そうな光を宿した瞳が躊躇なく俺を射抜いていた。俺の見立てでは可憐な部類に入る。ややエキゾチックな所も体格の割には大人びた表情も、なんというか将来が楽しみである。しかし彼女の語った内容から察するに、彼女もそれなりに出来るということか。だがこの体格差では……。

「君は」

「どうだろう、わからない。けれどすこし何かにあたりたい気分」

「はは、相手しようか」

「……いいの？」

「拳銃で撃たないなら……」

「そう」

す　　と、視線で追うのもやっとの早さの手刀が俺の瞳孔のほんの1ミリ手前を掠めた、何が起こったのか解らず絶句する。風圧で眼球が乾きひりひりと痛んだ、ほんの一瞬だ、じわりと汗が遅れて滲む。

「え……」

「綺麗な……緑」

「どうしますか、私としては彼の言いなりになるのも癪なので、こちらでもいいのだけど」

ずるりと胃を掴みだされるような独特の震えが背筋を走る、彼女の瞳がきらめいた、ああ、そうか、見た目じゃあないじゃないか、俺だってそうだろう。この感覚……。

「遠くで見ているよりも近づいて見ると小柄」

「……君は遠くで見ているよりもずっと、猛々しく見える」

「あなたは女性のよう、きつと普通の子なら羨ましがらる」

「良く言われるけどね、まあ、嬉しくもない」

「どうする？」

「どうしますかって、それは」

彼女に向かって斜め下から凧ぐように腕を振る。拳動も見せずに

打ち込んだ拳は、常人ならまともに喰らう、少しばかり出来る奴でもかわす事しかできないであろうそれを彼女はいともあつさりと受け止めそれだけではなく捌き、そして……。

「……痛いんだけど」

「ええ」

「一回外してくれる？」

「はい」

関節まで極めてきた。この少女は一体……。

「なかなか良い動きだったと思う」

「お褒めに預かり恐縮だよ、小さな教官殿」

「あなたであれば別に良い気もしてきた」

「何が」

「戦う事」

「ああ、奇遇だね。俺も同じ事考えてた」

かくして、かくしてこの戦闘ははじまったのであった。

互いに階段を一步また一步昇って行く、その度に互いの距離は徐々に離れていく。ねっとり空気は纏わりつくように感じる、その癖口の中の水分はからからに干上がっている。無意識に口角が吊り上がっていたことに気付き頭を振った。どうのも俺は、この感覚が堪らなく好きなのだ。相手は年端もいかない少女、しかし出来る。空気で、足取りで、口調で、そして眼光で解る。

「手加減なんてしないで」

丁度互いが対角線上に立った時、彼女が言った。もとよりそんなつもりはなかったが、聞いてみる。

「なんでそんな事を？」

「あなたを殺してしまった時に嫌な気持ちになる」

「じゃあ、武器有りでもいいね」

「その方が私の方が有利になる」

淡々と彼女は言った。確かに、どう鼻屑目に見ても素手でやり合えば、パワーは俺の方があろう、リーチも長い。わざわざ了承を取らずとも良いのでは、と思ったが彼女はそういう性格なのだろう。もし俺にそう言わせる為にそんな事を言いだしていたのだとすれば、頭の回転も速い、策士だ。

「さあそれはどうだろう？」

言って俺は腰の位置にあるバッテリーのスイッチをスライドさせる。常装の下には光学迷彩機能を搭載した戦闘用パワードスーツを着こんでいる。見えなければ、銃撃で狙う事も困難だろうと踏んだのだが。

（光学迷彩が反応しない？ 「魔素」が……無いのか？）

こちらの動揺を見逃す彼女では無い。吹き抜けに身を乗り出し勢い良く鉄柵を蹴ると躊躇なく立方体の上に着地、そのまま更に跳び眼前に迫る……早いっ！

「くそっ」

電源ケーブルを引きちぎり、咄嗟に向かい来る少女に向かってバツテリーのついたベルトを投げつける。彼女の手にした小型のナイフが、それを引き裂いた。勢いを殺さずに空中で身体を捻り蹴りを繰り返す少女、その足を右手で受け止める。

「ぐ……」

体格に似合わぬ重さに呻く。神経を引き裂くような痛みが奔るがそれよりも……痛みを堪えて腕をやや外側に倒すようにして足に絡め引き倒す。それを読んでいたかのように彼女は軸足で地面を蹴り上げ俺の顎目掛け更に追撃、上半身を仰け反らせると少女の踵が前髪を掠めて過ぎる。腰のナイフを引き抜いた。黒刃で大振りのそれは俺のお気に入り的一本だ。

互いに腰を落として向き合う。彼女が小さく腕を動かした、ナイフスロウイング……！ 自らのナイフで弾いた、瞬間少女は俺の腕を掻い潜る様にして懐に潜り込んでくる。普段は俺が敵に対してそう言う立場になるのだが……逆の立場ってのはやり難い。スロウイングナイフを弾いた反動を殺さずにそのまま仰け反った、軍靴の底で彼女の振りかざしたナイフを蹴り上げる。

「……」

少女は体勢を崩しながらもナイフを投げる、腕の力だけで飛び上がった距離を取る。彼女より数段階下に降った、頭上をナイフの軌道が掠め行く。反対に彼女は数段上に昇り俺目掛けて思い切り飛び上がった。視界で捉えられるかられないかのスピード、しかし一度空中に晒した身は無防備な物に成り下がる。彼女が丁度頭上に来た事を確認して袖口に仕込んだナイフを投げた。一本、彼女は冷静に弾く、しかし二本目はどうだ、一本目の陰に隠れて解らなかつたで

あろうつそれを彼女は弾く事が出来ず……鋭利な刃が少女の肩を引き裂く。(それでも捻ってかわしたか。動体視力も身体能力も並みじやないな、いや……人外だ)

バランスを崩しながらも着地した少女は肩口を軽く押さえて俺を睨んだ。

「二本のナイフを全く同じ軌道でしかも重ねて投げるなんて尋常じゃない」

「お褒めに預かりましたく恐縮だよ、リトル・サー」

「しかも最初に壊した右腕……使えてる」

「ああ……傷の治りが早いのは生まれつきだよ。ひび位ならね」

「異能……というわけではないみたいだけど」

「異能？ 「魔素」使いのこと？」

「「魔素」が何かは判らないけど、きつと似たようなものなんだと思っ」

「だったら俺は異能では無いね」

「そう」

少女は呟いて立ち上がった。そうしてバックステップで階段を昇り距離を取る。

「じゃあ、ごっごっごっはどっ」

一瞬、言われた意味が解らずに呆ける俺をあざ笑うかのように、轟音が響く。(爆発……？)目の前で火柱が立ち上りただでさえ不安定な足場が、崩れる！咄嗟に跳躍して鉄柵を掴む。爆発の位置は先程彼女が投げたナイフの落ちた辺り。(そんな仕掛けが！)

握り締めた鉄柵が自重で折れ曲がって行く。バキバキと不穏な音

を響かせながら階段部分のコンクリートと鉄柵を繋ぎ止めているボルトが外れて行く……。

「……ふざけっ」

足を振り勢いを付けると途端、裝飾性に富んだ脆い鉄柵は階段から剥がれて落ちる。その前に…… 勢いに任せて吹きぬけに身体を投げ出した。近くに浮かぶキューブにナイフの刃を突き立てる…… が思ったように突き刺さらず、火花を散らして滑る。(ならばっ) 思い切つて他のキューブを踏みつけた。気持ちの悪い弾力感、だが背に腹は代えられない。それを足場に跳躍、さらにキューブを伝つて上へと跳ぶ。少女の立つ位置まで辿りついた。跳躍して彼女に跳びかかる、その瞬間ぞつと背筋を何かが這い上がった。少女の冷たく鋭い視線が煙幕越しに突き刺さる。その手から投げられたものは……。

(オイルライター?)

次の瞬間再びの爆音が、今度は俺の背後で弾ける!

「……っ」

息が詰まる。吹き飛ばされて壁に叩きつけられた…… だけならばまだ良い。キューブの破片だろう、背の至る所が熱く、痛む。ああ、また鎖骨がいったかな、なんて感慨に更ける時間すらも彼女は与えてくれそうにない。少女が逆手に握りしめたナイフの煌めきが、迫る。

「……いつ」

無理に身体を引き起こして跳びかわすと、全身が悲鳴をあげた、特に左腕なんかは痙攣していてまともに動きそうに無い。鎖骨だけではなく神経もイってしまっているのだろう。治るのにも暫く時間がかかりそうだ。

思いながら左右に身体を捻って斬撃をかわす。交互に襲い来る斬撃は、しかしながら先程負傷した右の方が若干遅い。(気付いていないのかな……そうか、痛みにはまだ慣れていないのか)彼女も無意識での事だろう。少女の左の斬撃に躊躇なく痺れたままの腕を差し出した。肉の刺し貫かれる感触、そして骨の断ち切られる音が体内から響く。そうして彼女が振り被った右手のナイフを掴み自らの左腕に導く。

「なっ……!!」

両腕を固定され一瞬啞然とした彼女のから空きの胴体に掌底を二度三度と叩きこむ。

「……………く、う……………」

身体をくの字に折り曲げた彼女の手から力が抜ける、彼女の掌からナイフの柄がするりと抜け落ちる。(ああ、爆発の原理はワイヤードか)柄尻から伸びるワイヤーに今更ながら気が付いた。少女はそれでも気丈に(俺にはそう見えたのだが)俺の腹を蹴って距離を稼ぐ。(けどね)左腕から未だ伸びるワイヤーを握り引き寄せると彼女は空中で体勢を崩す。とまあ常識的にいえばここで床に叩きつけられるというのがオチだが、そうそう甘やかしてはくれないらしい。黒光りする銃口が俺を狙っていた、そして。

乾いた音が肩口を貫いた。(銃……つまり)俺は左腕から二本の

ナイフを引き抜いた。彼女は彼女でワイヤーを切断したらしい。二本のナイフを吹き抜けに向かって放り投げる。彼女が小さく眉を顰めるが解った。

「痛くは無いの？」

「いや、酷く痛むね」

「あなた、そういうのも快楽？」

「いや、本音を言えばどちらかと言うといたぶる方が趣味。男なんて大概そつだと思う」

「……」

空気を切り裂く音がした。

空の葉莢が、少女の足元にカラリと落ちる。

肉と血を内側から焼かれる匂い、そして熱……左肩が不意に軽くなったような気がした。視線だけをそちらに向ければ確かに腕はそこにあるのに、けれどそれが、切り離されたかのように、存在感が全く、無い。

「う……っ」

冷たい汗が顎を伝う。脳幹が痺れて視界も赤い、気がした。酷く、寒い、けれど、熱い、息が、上がる、膝が、震えた。

「あああああ！」

遅れてやって来た痛みにのたうつ、蹲って肩を抱いた。奥歯が欠けるんじゃないかと思うほど噛みしめる、それでも声が、溢れる。少女の見下す視線、それが絶対的で圧倒的に思えた。ああ、泣きそ

うだ、痛くて、悔しくて。本当に、情けない。本当に、理不尽だ……。本当に、嗤えてくる。本当に、ああ、嬉しい。

「俺は銃は嫌いなんだよ」

銃口に向かってナイフを投げつけた、その軌道は弾丸によって捻じ曲げられる、けれどそれでいい。跳躍して一足飛びに身体を翻す、そして力任せに黒刃の背で拳銃のスライダーに叩きつけた。もう使い物にならないと判断したのか、彼女は瞬時にナイフを握った。刃と刃が数度、火花を散らす。金属の擦れる甲高い音が響く。彼女が大きく腕をふるう。ワイヤーか、のこぎり状のそれが常装をこそぎ落す、だがそれしき……直接刺されたり撃たれたりするのならばともかく、防刃繊維の織り込まれたスーツを身に纏っている、そういう怖いものじゃあ無い。ただ、視認出来ている左腕をワイヤーがすり抜けて見えるのは気味が悪い。

少女が大きく飛び上がった。力押しでは不利と感じたか、鉄柵を器用に蹴って吹き抜けのキューブへと飛び移った。俺もその後を追う。（あの体格では重力を味方にして斬撃を繰り出さなければ辛いと言う所かな。まあ相手の頭上を取りたいって気持ちはよく解るんだけどね）跳び上がった俺に対して垂直に落下してくる彼女、身体を捻って擦れ違いざまに蹴りを入れる。互いに掠る程度、彼女は先程俺が足場に使っていたキューブ目掛けて着地を試みる。俺はといえば彼女とは対照的で、投げ出した身体を置く場所もなく重力に引きずられる。無防備になった俺を彼女が見逃すはずもなく、彼女は再び俺を目掛けて跳躍する。

俺は右手を少女にかざした。腕に仕込んだワイヤー、極細のそれは何かを切断するような威力は無いが、人間一人の体重を支えるに足る強度は持ち合わせている。それを向かい来る少女の手首目掛け

はなった。

「ワイヤー？」

少女の右手首に絡んだワイヤーを手繰り寄せる。空中でバランスを崩した彼女は、やはり流石と言うべきか……左手のナイフで邪魔なワイヤーを切断した。(いい反応だね、でも俺の狙いは寧ろソレだったりして)断ち切られたワイヤーを再び上に向けて放つ。それは身構えた少女の頬を掠めて更に上へ……。

「……？」

一瞬不可解そうな表情を浮かべる少女、ワイヤーの先端は螺旋階段の鉄柵へと絡む。

「じゃあ、今度は俺の番かな」

呟いて、電動リールを巻き上げた。

「……そっちな！」

少女は呻く、しかし遅い！俺が上へ引き上げられる力、そして彼女の自重落下の力がそのまま殺傷力となって少女、礼奈に向かう。互いの刃がぶつかり合う。

「……っ」

衝撃に痺れたのか、彼女のナイフが回転しながら奈落の底へと吸い込まれて行く。彼女自身もそれを負うように落ちていったがしかし、ここまでやってくるのも時間の問題だろう。響礼奈、凄まじい

相手だ。寧ろここまで俺が生きていられている事の方が奇跡だろう。左肩にはもはや痛みすらない、否痛みを忘れられても失った血液の量は相当量だと想定される。視界が歪み妙な汗で背中が濡れていた、顔もひやりと冷たく感じるし耳鳴りも酷い。

どうするか……なんだ。どうするか、ここで死んでも俺としては一向に構わない。別に元の世界に戻ったところで彼女は……シエラは……姉は、俺の物にはならないし、希望も何も無い、地に伏し這いつくばるようなあの日々が待っているだけなのだ。けれどこのまま何も出来ずに俺は……。意識が朦朧としてくる、きつとコレが最後になる。思えば腹部にも鈍い痛みがあつた、壁に打ち付けられた時からだ。そちらの方は徐々に回復してきているとはいえ。

どうせならば気持ちよく、一撃で、痛みを感じる隙もなく、殺して貰いたいと思った。この最後の瞬間に全てをかけて俺は、俺を殺そうと思った。きつとそれがいい、良いに決まっている。シエラあねの姿を思い浮かべた。彼女は俺を拒絶した。俺には他に誰も、何もいらなかったのに。脳内の彼女はどこか物憂げな表情で、そうだったって俺に対して彼女が向ける表情はそうだった。コバルトの瞳、朱の滲んだ薄い唇、折れてしまいそうな身体は白くて……ムスクの薫りがする。

ぼんやりと光差す先を見つめた。シャンパン色の光に包まれた礼奈がいる。キューブからキューブへと飛び移り俺を狙っている。先程から彼女は、いつだって俺を仕留められた筈なのにそうしなかった。遊ばれているのかもしれないし、手加減をされているのかもしれないし、解らなかつたがもう、この馬鹿げた世界を閉じてしまおうじゃないか。けれどそれを言ったら彼女は果たしてそうするか？　しないだろう、きつとこう言うにきまっている。

「そういうのは、違つと思つ」

ならばありつたけの殺意を込めた視線を投げつけるまで。きつと彼女は挑発に乗ってくる、そういう駆け引きにはまだ慣れてい無さそうだから。なんだかコレはコレで酷く愉快な気分になった。年端もいかない少女相手に情けの無い限りではあるが。（否だからこそ、面白いんだろう？）

少女が視線の先で跳躍する。大きく振り被りながら俺に向かって落ちてくる。セピアの光を背負ったその姿は何とも可憐で残酷だ。そんな彼女に向かって一言、ただの一言言葉を投げつける。

「…… そんなにレディが足を見せるものじゃないと思うけど」

彼女の表情は変わらない。

「はあ、しかし女の子って大変だよな。だからイライラしていたんでしょ？」

一瞬彼女の瞳が大きく見開かれた。

「死ね」

今までで一番激しく迷いの無い斬激が襲う。左の肺を突き破る鋭利な刃が勢いよく引き抜かれた。よろけて壁に凭れかかる。さあ、早く、殺してくれて構わないから。彼女のナイフが再び迫った、狙っているのは首だろう。（いい、それで）目を瞑った。まあ、もともとして見えないのだが。

「はい、はい、はい！　そこまで！」

自分の両肩を引く者が居る。礼奈は勢いよく振り向いた。今この瞬間を邪魔する奴は野暮だと、彼女は思った。出来る事ならば刺し貫いてしまおうか……しかしその気を急速に削がれてしまう。彼が立っていた。確か名前は五十嵐天成……。

「もう十分に勝負あつたでしょう？」

「……」
「そう睨まないでくれるかな。まあ、全部見ていたからさあ、気持ちには解らなくもないんだけど」

「……」

五十嵐は礼奈の肩を宥め梳かすように軽く叩き、そうして彼女の先程までの対戦者の額に指先を付けた。甲高い、繊細なガラス細工が割れる様な音がして空気の対流が停止した、ように礼奈は感じた。

「倒さなければ、帰れないとあなたが言った。それとも満足？」

「うーん、それはそうなんだけど……。」

礼奈が言つと彼は困つた様に頭を振つて諭すように言つ。

「いやあ、まあ俺としてはね。意外とこの空間気に入ってるんだよね。第四の壁をぶち抜いた先つてやつ？」

「……」

「ああああ、確かに言った。俺は言ったよ？　殺し合いをしたら開放するつて、満足したら開放するつて。でもね、これ以上やったら見てよこのお兄さん、ゲージもレッドラインで点滅してる。それに

比べてキミはまだまだグリーン、セーフティゾーンだろう。……いやそうではなくって、俺はあくまで君の為に言ってるんだぜ。なんせ彼には一つの世界を滅ぼしたっていう前科があるんだから何せそれもゲーゼ口、振り切ったらトップギアっていう厄介さ……それを呑みこんだ上で君はまだやるの？ 俺は 満足かと言われればまあ満足なんだよ。このお兄さんが君みたいな子にボコられるつてのは爽快だったしね。あと競り合いの無い一撃での勝負の結末なんて誰も望んではいない、そうだろう？」

礼奈に構わず男はべらべらと言いたい事を言いたいだけ言った。彼女ははあ、っと肩の力を抜き俯いて呟く。

「……長い」

「そんな言い方はあんまりだ」五十嵐は不貞腐れたように言っただけ、しかし面白がるようにくっくと咽喉の奥で笑いこぼした。

「この階段を昇ってごらんよ。昇った先で君たちは解放される。なあに、すぐさ。見た目よりもそれは案外に近い物だ」

目を固く瞑ったままでいたから、だからここは暗闇の延長線上で、多分俺は痛みも感じる間もなく死んだんだろう、だとしたらここで思考するこの俺とは何者か……そっと、目を開けた。視界に飛び込んできたのは彼の少女、俺を殺した響礼奈の姿で、ぎよっとした。思わず身構える。

彼女からは既に殺気が消えていた。意志の強そうな黒目がちの瞳が俺を覗きこんでいる。いや、まったく冗談では無い。今際に姉の

姿が拝めたら最高で、そうじゃなかったらまあいいかなあとも思うがよりによって何故少女なのだ？

「正直な話、お迎えなら俺的にはもつと何かこう、年上の美人が…」

俺が言つと彼女は一瞬視線を平らにして、そして短く言う。

「怪我」

「え？」

「もう何ともない？」

「ああ、いや。あれ？　俺は死んでいないの？」

「邪魔が入ったから」

彼女は素っ気無く言つて、視線をあらぬ方へと向けた。少し苛立ったのかもしれない。だから、今の状況に対して「何故」だとか「どうして」だとか詳しく聞く気にもならなかった。何となく、ああ、そういう風になつていゝんだ…と、もう無理にでも納得をすることにした。そうか、また死ねなかつたのか…運が良いのやら悪いのやら…俺は少しだけ、笑つた。少女はそう言う俺を見て少しばかり肩をすくめると「とにかく、上に昇りましょう」と言つた。

二重螺旋の階段の一方を並んで歩く。先程まで戦闘をしていたとは思えないほどの穏やかさがそこにはあつた。互いに無言である。時たま俺が話しかける事に彼女がぼつりと答える。それ以外は二人分の足音しかない。

「しかし正直驚いたけどね、君は強い」

「いいえ、私はまだまだ」

「何故？」

「安い挑発に乗ってしまったから。あの発言自体どうかとは思っ、でもあんな陽動に一瞬でも「まさか」と思ってしまった自分に一番憤りを感じる」

「あ……………」

「まだまだ」

そのうちに頂点と思しき場所へ辿りついた。そこは二重螺旋の交点、いままで交わらなかった物が交わる特別な場所……天窓からは光が燦々と降り注ぎ、その眩しさに目を細めた。眼下を見ればくらくらと眩暈を感じるほどの高さ、目の前の少女はじつと俺の顔を見つめていた。微笑み返すと少し視線を逸らす。

「二重螺旋つてのは交点が近くにあるのにもかかわらず本来ならば絶対に交わらない。けれどたまにはこんな風に繋がっている場所もある」

「そうですね」

「また万が一、こういう事があったなら、その時はまたお相手をしてくれるかい？」

言つと少女は少しだけ目を見開く。

「そうだな、俺としては少なくとも5年後以降で、その時にはこんな変な場所じゃあ無くって、普通の繁華街とかでさ？ バーにでも行ってみたいと思うんだけど、どうかな？」

「嫌です」

……………あっさりと断わられた。少し胸が痛むがまあ仕方ないだろう。

「それじゃあ」

「……」

そうして、俺たちは互いに別々の道を辿った。

END .

> i 2 0 0 7 7 | 3 3 1 <

(後書き)

個人的に、今まで書いた殺陣シーン中もっとも難しかった(舞台設定が)

なんでこんなめんどろな舞台にしちゃったのだろうか、俺。

(かっとなってやった。。。反省している。。。)そしてタイトルはミクの名曲から拝借。

スペック的に圧倒的にキリトの方が弱いので、ぼろ負け。

ほらーそれはあ、スネークが正面切って敵と戦うと弱いのと一緒に

……orz

そして本編より先にネタばれ。

書いていて五十嵐天成が……なんか別キャラクターになってしまっていたら申し訳ないのですが、個人的には満足。ザ・俺の趣味。(だめじゃん)

ガチ戦闘は疲れたのでセラナで一発やりたいです。(希望的観測)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8496r/>

二重螺旋の羅刹と骸〔クロワッサン様企画掲載〕

2011年10月5日19時55分発行